奈良のむかしばなし

第三十二話

文・山崎しげ子

仁王さんと とんど

菩提寺山門（仁王門）

現在の仁王門は、昭和59年に移築したもの。柱などは江戸時代のものを再利用している。阿吽の仁王像2体は、室町時代の作と伝わる。格子の間から仁王さんが見える（右:阿形像、左:吽形像）。

「仁王さん」で知られる御所市伏見の菩提寺。今も山門に、約三メートルの大きな阿形、吽形の二体の仁王さんがおられる。

仁王さんは、お寺を守る、いわば、ガードマン。お顔は恐ろしい忿怒の形相で、手には金剛杵とよばれる武器を持つ。そんな仁王さんにまつわるお話。

※

昔、伏見の仁王さんのところへ、「とんど」という悪いやつが来ては、いたずらをして困らせていた。

あるとき、そのとんどがまたやって来た。仁王さんは「とてもかなわん」と、逃げ出した。とんどはあとを追って来た。とうとう追い詰められた仁王さんは、とっさのこと、そばにあった一本の木によじ登った。

やっと追いついたとんどは、その木のちょうど下にあった井戸の底を覗き込んだ。水に映っていたのは、仁王さんの姿。それを本物の仁王さんと思ったとんどは、井戸の中に飛び込んだ。仁王さんは「これ幸い」と、木から降りてその井戸を急いで埋めてしまった。

それからというもの、伏見では、井戸を掘るととんどが出ると、井戸を掘らなくなった。小正月に「とんど」をしない習慣が今も続いている。

「とんど」は、その小正月に正月の門松や注連飾りを持ち寄って燃やす火祭りの行事。菩提寺は南北朝時代の戦火で一度焼失した。仁王さんが火を怖がるのはこのためとも。

※

菩提寺は、寺伝によれば、奈良時代の行基の創建で、かつて子院は三十七を数え、広大な寺域を占める大寺院であったらしい。今の本尊十一面観音像は平安時代後期の作。山門の仁王像は室町時代の作といわれる。大師堂には古い仏像も多い。

金剛山地の中腹にある伏見は、緑の山並みを背に、北東に大和三山、遠く東に高見山を望むのどかな山里。大自然の豊かさ、歴史の奥深さから、菩提寺の檀家総代で寺を管理する前川博さんは「大和の隠れ寺。ぜひ訪れて」と語る。

茅原の大とんど

毎年1月14日、吉祥草寺で行われる壮大な火の祭典。直径約3m、高さ約6m、重さ約1t。雌雄二基のとんどが作られ、雄・雌の順に点火される。一年の無病息災などを祈る。県指定無形民俗文化財。

吉祥草寺へは、JR玉手駅下車 北へ約300m

物語の場所を訪れよう

「伏見山 菩提寺」（御所市伏見）へは…

金剛・葛城山麓を南北に走るハイキングコース（葛城の道コース）。高天彦神社と高鴨神社の中間に位置する。

問 菩提寺檀家総代（前川さん） ☎0745-66-0543